教師用学級づくり尺度の作成

— 発達障害児が在籍する学級担任を対象として —

○森 康行¹・藤吉晴美²

(¹ 勝央町立勝岡田小学校 ² 吉備国際大学心理学部)

キーワード: 学級づくり尺度, 発達障害, 教師のストレス

Development of the class management scale for school teachers who have children with developmental disabilities

Yasuyuki MORI, Harumi FUJIYOSHI

(¹ Syouou Town Katsumada Elementary School, ² School of Psychology, Kibi International University)

Key words: developmental disabilities, class management, stress of teacher in elementary school

目 的

小学校教師のストレス原因のひとつに、児童への対応が挙げられているが、なかでも近年指摘されているのが、通常学級における学習又は行動面で著しい困難を示す児童生徒への関わりにまつわるものである(岡本・網谷, 2008)。ところが、発達障害傾向のある児童が在籍する小学校通常学級で、教師がどのような学級づくりの工夫をすればストレスが軽減するかについての研究は筆者らが知る限り着手されていない。

そこで本研究では、ストレス軽減に寄与する学級づくりについて明らかにするために、「発達障害傾向のある児童が在籍する学級の教師用学級づくり尺度」の作成を目的とした。

方 法

対象者: A 市公立小学校 24 校、発達障害傾向のある児童が在籍する通常学級担任教師 94 名(男性 34 名, 女性 60 名:平均年齢 40.8 歳, $SD=11.9$)。

調査時期: 2017 年 6 月下旬～7 月上旬。

質問紙の作成: 発達障害傾向のある児童が在籍する学級の学級づくりの工夫について、半構造化面接及び自由記述により 38 名の小学校教師から回答を得た。これらの項目を *KJ* 法にかけ、質問紙(全 53 項目)を作成した。「とてもよくする」から「まったくしない」の、6 件法で回答を求めた。

倫理的配慮: 吉備国際大学倫理委員会の承認を得て研究を進めた。研究趣旨は、文書と口頭にて A 市教育委員会学校教育課および協力小学校に説明し協力を得た。

結 果

因子分析: 探索的因子分析(主因子法, *promax* 回転)を行った結果、5 因子 24 項目が抽出された(Table1)。

第 1 因子は、「良いことをした時には微笑みほめている」など 11 項目からなり、〈該当児童へ接する時の配慮〉と命名した。第 2 因子は、「授業をモジュール化して組み立てている」など 5 項目からなり、〈授業作りの工夫〉と命名した。第 3 因子は、「他の先生から声かけしてもらっている」などの 3 項目からなり、〈職員間での意識の共有〉と命名した。第 4 因子は、「座席は目の届きやすいところにしている」などの 2 項目からなり、〈環境作りへの配慮〉と命名した。第 5 因子は、「苦手科目や行事前に予想される準備物や状況を該当保護者へ連絡する」などの 3 項目からなり、〈該当保護者へ接する時の配慮〉と命名した α 係数は、各因子において .78～.87 の値を示し、一定の内的整合性が確認された。

性別による比較: *t* 検定を行った結果、〈該当児童へ接する時の配慮〉と〈該当保護者へ接する時の配慮〉の因子において、女性教師の平均得点は、男性教師の平均得点より有意に高いことが示された ($p<.05$)。

担任している学年別比較: 担任している学年によって、低学年、中学年、高学年の 3 群に分け、一要因の分散分析を行った結果、〈職員間での意識の共有〉に主効果が認められたため、多重比較検定 (*Tukey*) を行った。その結果、高学年の方が、

低学年よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。

教職経験年数による比較: 1～10 年, 11～20 年, 21～30 年, 31 年以上の 4 群に分け、一要因の分散分析を行った結果、どの因子においても差は示されなかった。

Table1 学級づくりの工夫に関する因子分析結果
(主因子法, *promax* 回転)

	I	II	III	IV	V
I: 該当児童へ接する時の配慮($\alpha=.87$)					
31. 良いことをした時には、微笑みほめている	.82	-.25	-.08	-.03	.04
38. きちんとした呼び方など、言葉遣いに気をつけている	.76	.04	-.07	-.05	-.04
36. 失敗した時など、該当児童の気持ちを代弁し共感している	.71	-.09	.01	-.08	.10
34. 子どもの困り感に寄り添い、話をきちんと聞いている	.70	.00	.02	.00	.08
33. 成功体験を多く積ませ、自信を持たせている	.69	-.04	-.03	-.05	.07
13. 声の大小や抑揚に気をつけて話している	.61	.22	-.03	.11	-.20
43. 感情で叱らない	.56	.07	-.16	.10	.11
41. トラブルが起きた時は様子をしっかりと聞きこちらの思いを伝えている	.51	.11	.12	-.05	-.04
40. ある程度許容しているが、理不尽な行動は認めない	.50	.14	.04	.09	-.34
32. アイコンタクトやハンドサインをおくり、認めている	.45	-.05	.20	-.11	.19
4. 集中しているか、確かめてから話している	.37	.19	.13	.11	-.03
II: 授業作りの工夫($\alpha=.84$)					
7. 授業をモジュール化(例: 15分×3)して組み立てている	-.04	.94	-.02	-.07	.00
8. 授業の内容をねらいにそって、パートごとに分けている	-.10	.88	.04	-.06	.02
6. 授業のパターン化(例: 問題解決学習等)を意識している	-.02	.69	-.08	.12	.03
9. 書く、話す、動かすなどの活動を、意識している	-.07	.54	-.05	.00	.15
15. 板書の構造化をはかり、流れがわかるようにしている	.22	.40	.12	-.16	.17
III: 職員間での意識の共有($\alpha=.78$)					
52. 他の先生から、声かけしてもらっている	.04	-.06	.87	.01	-.14
51. 校内で、定期的に情報共有を行っている	-.08	-.06	.86	-.06	.05
53. 校内研修では、事例研究を行っている	-.07	.09	.59	.08	.07
IV: 環境作りへの配慮($\alpha=.81$)					
22. 座席は、目の届きやすいところにしている	-.04	.03	.07	.99	-.05
23. 座席は、面倒見のよい子などをそばにするなどしている	-.02	-.07	-.07	.68	.13
V: 該当保護者へ接する時の配慮($\alpha=.82$)					
19. 苦手科目や行事前に予想される準備物や状況を該当保護者へ連絡する	-.02	.11	-.06	.02	.84
20. 努力してできたことを、該当の保護者に連絡している	.07	.03	.02	.03	.69
17. 該当の保護者の願いや悩みを、知るようにしている	.22	-.06	.18	.23	.45
因子間相関		II	III	IV	V
		.46			
			.53	.30	
				.35	.11
					.38
					.63
					.26
					.57
					.31

まとめ

本研究では、発達障害傾向のある児童が在籍する学級の教師用学級作り尺度作成を試みた。その結果、〈該当児童へ接する時の配慮〉〈授業作りへの工夫〉〈職員間での意識の共有〉〈環境作りへの配慮〉〈該当保護者へ接する時の配慮〉の 5 因子 24 項目が抽出され、学級づくりのために、教師が行っている工夫が明らかになった。

今後の課題は、本尺度を用いて、発達障害傾向のある児童が在籍する学級の教師のストレス低減に影響を与える学級づくりの工夫について検討することである。